



Title	日台国際結婚家庭の家庭言語政策
Author(s)	中村, 香苗
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2025, 21, p. 9-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

日台国際結婚家庭の家庭言語政策

—「一親一言語の原則」を貫いた親子のライフストーリー—

中村 香苗（淡江大学）

128094@o365.tku.edu.tw

Family Language Policy in a Japanese-Taiwanese Intercultural Family:

Life Stories of a Mother and a Child Upholding “One Parent-One Language Principle”

Kanae NAKAMURA

要旨

本研究はライフストーリー研究の枠組みで、日本で徹底した「一親一言語の原則」(OPOL) で子育てをした台湾人母と成人した娘の語りをもとに、母娘それぞれが OPOL の育児・成長過程をどう捉えているのかを探究した。分析の結果、成長過程で娘のバイリンガリズムに対する態度が急激に悪化し、ネガティブだった時期を経て、最終的にはポジティブに捉えられるようになった経緯が明らかになり、その間に母娘ともにさまざまな困難があったことが浮き彫りになった。それでも台湾人母が OPOL を貫き通せた要因として 1) 母自身の強い意志、2) 夫の高い中国語能力、3) 第三言語である英語の存在、が見出され、また間接的な要因の可能性として 1) 母娘ともに高い言語能力、2) 娘の台湾に対する親愛、3) 母娘の良好な関係、が示唆された。最後に、娘の中国語に対する羞恥心の要因が周りの奇異や反感の目であった点は、多文化化する日本社会が真摯に向き合うべき課題と言えよう。

Abstract

This study examines the narratives of a Taiwanese mother and her adult daughter, who was raised in Japan under the strict “one parent-one language” (OPOL) principle, using a life story research framework. The analysis reveals that the daughter’s attitude toward bilingualism underwent a significant shift: from a rapid deterioration, marked by a period of negativity, to a more positive perspective in later years. The narratives highlight various challenges faced by both the mother and the daughter during this time. The findings underscore several key factors that enabled the mother to maintain adherence to OPOL: (1) the mother’s strong determination, (2) the father’s high proficiency in Chinese, and (3) the presence of English as a third language. Additionally, the following indirect factors are suggested: (1) the high oral proficiency of both the mother and the daughter, (2) the daughter’s emotional connection to Taiwan, and (3) the harmonious relationship between the mother and the daughter. Moreover, the daughter’s embarrassment about speaking Chinese stemmed from the stigmatizing and antagonistic attitudes she encountered in her social environment. The study argues that such issues require serious attention from contemporary Japanese

society to foster inclusivity and support for bilingual/multilingual individuals.

キーワード：家庭言語政策、一親一言語の原則、国際結婚、台湾人母、ライフストーリー

1. はじめに

社会の共通言語が自分の母語と異なる場所で子どもを育てている親にとって、子どもにいかに自身の言語や文化を継承させるかは大きな関心事の1つだろう。国際結婚のように家庭内に母語が異なる大人が複数存在する場合、誰が、いつ、どの言語で子どもとコミュニケーションを図るのかも考えなければならない。

近年、バイリンガル教育や継承語教育研究の分野では、社会や教育機関での言語政策だけではなく、親の家庭内での言語教育方針や実践に関わる「家庭言語政策」(Family Language Policy, 以下 FLP) (King, Fogle & Logan-Terry, 2008)への注目が高まっている。Wilson (2020)は、FLP 研究の枠組みにおいて、子どもの言語習得の観点から親の言語管理ストラテジーの有効性を解明する研究が増加している一方で、FLP が子どもにとってどのような経験なのかを明らかにする研究が少ないことを指摘している。そこで本研究では、ある1組の在日国際結婚家庭の FLP を、外国人親と子ども両者の視点から検証することを試みる。具体的にはライフストーリー研究の枠組みで、日本で徹底した「一親一言語の原則」(one parent-one language principle 以下、OPOL) で子育てをした台湾人母と成人した娘へのインタビューを通して、母娘それぞれが OPOL の育児・成長過程をどのように捉えているのかを探求する。特に、子どもの幼少期に台湾人母がどのような思いで中国語のみの子育てを実践したのか、子どもの成長過程で母娘それぞれにどのような困難があり、それを乗り越えた経験を2人がどうふり返るのかを2人の語りを対比させながら検証していく。分析結果をもとに、本研究対象の家庭で OPOL を貫くことができた要因を考察する。

2. 先行研究

FLP は家族間の言語使用に関する明示的で公然の計画(explicit and overt planning)と定義され(King, et al., 2008, p.907)¹⁾、言語政策研究と子どもの言語習得研究の交わる領域として近年注目が高まっている。これまで FLP の研究枠組みで、複言語家庭の親の言語イデオロギーがいかに親の言語選択や実践に反映され、それが子どもの言語発達にどう影響するのかという観点から多くの研究がなされてきた (King, et al., 2008)。

家庭でのバイリンガル育児方法として、特によく知られているのは1人の親が1つの言語の使用に徹する「一親一言語の原則」(OPOL) であろう。Wilson (2020, p.3)によれば、古くは1902年にフランスの言語学者 Grammont によってその概念が紹介されており、それ以降も言語学者の Ronjat (1913)などが自身の育児の実践をもとに OPOL を提唱している。OPOL の利点は、各言語の使用場面を最大限にすることができる、子どもが2つの言語を混ぜて話すことを抑制することができる点である(坂本, 2019)。しかし、英語とドイツ語の OPOL 家庭で育つ6人の幼児と親のインタラクションを検証した Döpke (1992) では、OPOL の実践はマイノリティ言語の親にとって相当の労力がいると

結論づけられている。具体的には、マイノリティ言語話者の親は、会話の中で子どもの誤用に対処したり、語彙や文法を教えるためにさまざまなストラテジーを用いていることが判明した。

実際、OPOL を徹底して実施することは容易ではないようだ。Yamamoto (2001) は 118 戸の英語-日本語家庭にアンケート調査を実施し、その中で最も多く使われていた実践が OPOL ではないことを明らかにした上で、OPOL が必ずしも子どもの活発なマイノリティ言語使用を保証するわけではないと述べている。前述の Döpke (1992) の研究対象の 6 人の子どもたちも、小学校入学以降ドイツ語を話すことが大幅に減ったと報告されている。また、言語の使い分けによる子どもの心理的負担や家庭不和の可能性、親が 1 つの言語に固執しすぎることによる子どもの会話拒否など、OPOL には批判や注意点があることも指摘されている (中島, 2016, p.68-69)。さらに、従来の OPOL の研究対象が言語学者自身か中流家庭に偏りがちで、扱われる言語も社会で権威のある言語 (例えばノルウェーにおける英語など) である場合が多く、移民コミュニティでの継承語習得には応用できないという批判もある (Döpke, 1998)。しかしながら Döpke (1998) は、社会的な言語サポートがない環境下で子どもへのマイノリティ言語のインプットを最大限にする親の言語選択として、OPOL が有効であると主張している。

従来の FLP 研究の焦点が、主に子どもの継承語の発達に対する有効性を解明することに置かれていたのに対して、近年は子どもの観点を考慮した FLP 研究の重要性も指摘されている。例えば Fogle & King (2013) は、親の言語イデオロギーのみが FLP を決定づけるのではなく、FLP の拒否や子ども自身の言語イデオロギー、子どもの言語能力の向上など、子どもが親の言語イデオロギーや実践に影響を与えることを例証している。

さらに、Wilson (2020) はイギリス在住の 6 組の英語母語話者とフランス語母語話者の国際結婚家庭を対象に、子どもにとってのバイリンガリズムの意味や健全な家族の在り方という観点からの FLP 研究を実施した。具体的には、各家庭の両親と子どもそれぞれへのインタビュー、子どもの言語ポートレート、親子間インタラクションの録画データを包括的に検証した。その結果、6 組中 3 組の家庭で OPOL を実践しており、そのうちの 2 組はフランス人親とのフランス語使用を厳しく要求し、英語とのトランスランゲージングを許さない態度を取っていた。また別の 1 組は、家族全員が家庭内でフランス語を使用する方針で、やはりトランスランゲージングを認めない厳格な実践を行っていた。子どもに対するインタビューや親子間インタラクションの分析結果からは、概して英語とフランス語の使い分けを子どもに厳しく要求する家庭では、子どもたちが程度の差はあるフランス語使用に対して抵抗感を示す傾向があることが明らかになった。

本研究の対象である台湾人母子の家庭でもかなり厳格な OPOL を実践しており、やはり子どもからの抵抗を経験している (詳細は 4 節を参照されたい)。しかし、Wilson を含め従来の OPOL の研究対象は子どもが幼児から学齢期である場合が多く、それらの研究結果は現在進行中の育児における知見である。それでは、OPOL 育児が終了した親とその成人した子どもは、その経験を振り返ってどのように意味づけるのだろうか。本研究は、そのような問い合わせに対する 1 つのケーススタディである。

3. 研究方法

本研究では、半構造化インタビューの手法で取得した 1 組の台湾人母娘それぞれの語りを、質的

調査法の1つであるライフストーリー研究（桜井, 2002; 桜井・小林, 2005; やまだ, 2021）の枠組みで検証する。桜井・小林（2005）によれば、ライフストーリー研究とは「人生や過去の出来事の経験をインタビューすることによって人びとのアイデンティティや生活世界、さらにローカルな文化や社会を理解するための社会調査」(p.7) である。桜井（2002, p.39）は、異なる調査者がまったく同じインタビューをすることが不可能なライフストーリー・インタビューでは、量的調査にとっての「信頼性」に代わる基準は手続きの「透明性」であり、調査過程を読み手に対して明確にする必要性を主張している。そこで、以下に調査協力者の概要とインタビュー実施方法、分析手順を詳説する。

3.1 調査協力者

本研究の対象者は、台湾人母Aさんとその娘のアケミ（仮名）である。Aさんは、台湾で高校を卒業した後、1985年に語学学校で日本語を学ぶために来日した。1年後に語学学校の勧めで大学に入学し、卒業後は台湾に戻って就職したが、1994年に日本人男性との結婚を機に首都圏に移住した。夫は中国への留学歴があり中国語が堪能だが、夫婦の会話は日本語である。1995年にアケミが生まれ、6年後に長男が生まれた。Aさんは2人の子どもと徹底して中国語のみで会話をしたため、2人とも中国語が流暢に話せる。アケミの幼少期から現在まで仕事を続けている。

アケミは幼稚園から大学まで日本の学校に通った。幼少期は長期休みになると台湾に滞在し、現地の子ども達と一緒に「安親班」という日本の学童保育のようなクラスに通ったこともある。大学では英語を専攻し、大学時代に1年間台湾に交換留学をした。大学卒業後、台湾の大学院へ進学した。調査当時は大学院を卒業し、台湾で就職して約1年半経ったところで、台湾人男性との結婚も決まっていた²⁾。

3.2 インタビュー実施方法

筆者は2021年から、日本在住の日台国際結婚家庭および台湾人家庭の継承語教育に関する研究プロジェクトを実施しており、知り合いを通じて調査対象条件に合致するアケミを紹介してもらった。そしてアケミを通じて、Aさんへのインタビューも実現した。そのため、インタビュー時2人と筆者とは初対面であった。

Aさんとアケミへのインタビューは、どちらもオンラインで半構造化インタビューの形式で行われた。2人には事前に調査趣旨とプライバシー情報の取り扱い方法などを記した研究同意書を送り、インタビュー時には同意書の内容を再確認して同意を得た上でインタビューを開始した³⁾。

まず、2022年4月にアケミに約45分間、幼少期の台湾の思い出や、家庭や学校での経験、台湾留学とその後の就職などについて話を聞いた。アケミはこのインタビュー以前に公的な場で自身のバイリンガル経験を日本語で講演する機会があり、事前に調査者にその時のスライド資料を提供してくれた。そのため、特に言語にまつわる経験については、その資料の内容を参照しながらさらに詳細を聞き出すようなインタビューになった。

Aさんへは、2022年7月に約40分間、インタビューを実施した。質問事項には来日の経緯や当時の留学生活、日本における結婚や育児、当時と現在の日台関係についてなどが含まれていた。育児に関しては、アケミへのインタビューで家庭内が徹底したOPOLだったことが印象に残ったため、特にその点について詳しく話を聞いた。

2人の会話は録画と録音をし、すべて文字化した。

3.3 分析手順

分析では、アケミの幼少期から中学までの時期に焦点を当て、時間の流れに沿ってAさんとアケミの語りを対比させながら検証する。分析対象をこの期間に絞る理由は、4.1でも詳説するが、アケミのバイリンガリズムに対する態度の変化が特に顕著だからである⁴⁾。分析ではその変化の過程や原因をアケミの語りから明らかにし、同時にAさんが当時のことどう語るのかを探ることで、OPOLが母娘それぞれにとってどのような経験だったのかを解明する。

4. 分析

4.1 アケミのバイリンガリズムに対する態度の変遷

文字化資料でアケミのライフストーリーを確認したところ、日本語と中国語のバイリンガルとして成長する過程で、アケミのバイリンガリズム（あるいは中国語）に対する感情や態度には大きな変動があったことが確認できた。その変化をアケミの用いた「ポジティブ」「ネガティブ」「ニュートラル」という言葉を用いて表すと、図1のようになる。

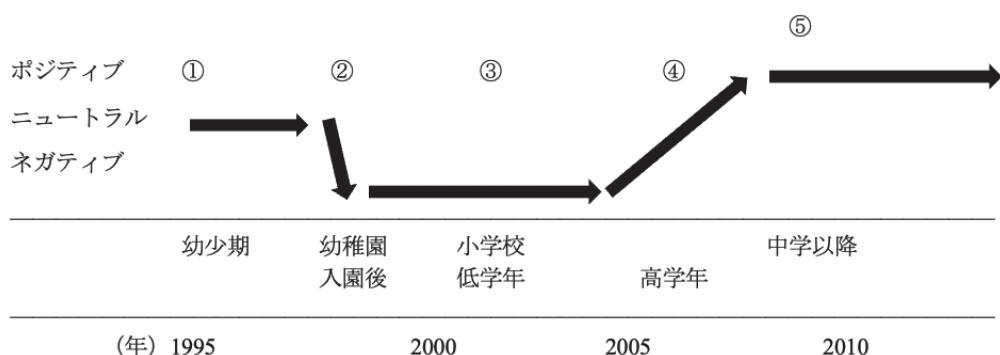


図1 アケミのバイリンガリズムに対する感情の経年変化

アケミは、幼稚園に入るまではバイリンガルであることについて特になんとも思っていなかった（①）が、幼稚園入園後、急激にネガティブな気持ちを持つようになり（②）、小学校後半までネガティブな状態が続いた（③）⁵⁾。その後、徐々に気持ちが上向き始め（④）、中学以降はポジティブな感情を持つようになり、その後はポジティブな状態が維持された（⑤）。

以下の項では、①から⑤の各時期ごとに、Aさんとアケミそれぞれの語りを検証する。

4.2 アケミの誕生から幼稚園入園まで：ニュートラル期

まず、Aさんはアケミが生まれた時、言語面でどのように育てようと考えたのか。

発話データ 1⁶⁾

子どもが生まれた後にまず自分の子どもと外国語を使って、外国語を喋ることをまず考えられ

なかったんですね。【ああ日本語ってことですか?】はい、日本語って母国語ではないので。それが1点と、もう1点は私の子どもと私の両親や兄弟、言葉が通じないのも考えられませんでしたので、とにかく子どもには徹底的に母国語を教えようと思ってました。

Aさん 7:04-7:35

発話データ 2

こういう時は中国語、こういう時は日本語ってやっていくと、どうしても日本語の方が上になるわけですから（ ）しまうと思ってたんですね。はい、なのでやるとしても、本当母国語を教える、教えようとしたら徹底的に引かない、っていうのが私の考えでした。

Aさん 8:44-9:07

以上の語りには、子どもと外国語を喋ることや言葉が通じないことは「考えられない」、「徹底的に教えよう・引かない」など断定的な表現が用いられており、自分と台湾の家族とのコミュニケーションのために子どもに中国語を継承させるという当時のAさんの強い意志が感じられる。そして、アケミに対してAさんが中国語で、夫が日本語で話しかけていたところ、アケミは物心がつく頃には以下のような理解をするようになっていた。

発話データ 3

小さいころ母、うちのルールは母が中国語、父が日本語っていうルールだったんですけど。その、ま、ほんとにS県で普通の田舎に住んでたので周りに外国人とか全然いなくて、なのでその、あのなんてんですかね、どの家庭も「お父さん語」と「お母さん語」があると思ってたんですよ。【え？それはお父さんお母さんが「これはお父さん語だよ、これはお母さん語だよ」っていう言い方をしてたんですか?】いや、してないんですけど、私勝手にそう思っていたみたいで。で勝手にそのお父さん語っていうのは全国共通語でお母さん語っていうのはその家庭ごとに違うものがあると思っていて…

アケミ 2:49-3:35

このように、アケミは父親と母親が異なる言語を話すことをかなり小さいうちから理解できており、またそれは一般的なこととして何ら特別な感情を持っていなかった。その結果、アケミによれば、幼稚園に入る頃には「たぶん台湾の3歳児と同じぐらいの中国語レベル」があったという。ところが、バイリンガリズムに対するニュートラルな意識は幼稚園入園後に急激に悪化する。

4.3 幼稚園入園後：急降下期

アケミのバイリンガリズムに対する感情が急降下した原因として、家庭外と家庭内での経験に大別される。まずは家庭外の経験から見ていく。

発話データ 4

幼稚園にあがって、他の人にはわからないこと、「お母さん語」とか言うと他の人にはわからな

い顔をされたりとか、あとは当たり前だと思って外でお母さんと中国語とか喋ると、まあそのときほんとに外国人もいないですし、中国語っていうか台湾ってそもそも認識されていないので、なんか冷たいというか、何喋ってるんだって顔で見られたり、あとは公園でお母さんと中国語をしゃべっていて、見知らぬ男の子から「自分の国に帰れ」って言われて砂を投げられたりとか、そういう苦い経験がけっこうあって、私の家庭環境恥ずかしいなと思うようになって、そこがこうがつと下がった原因ですね。

アケミ 3:50-4:36

発話データ 5

幼稚園の頃に1度中国からの高校生がいて、通訳になってほしいっていうので急に先生に「アケミちゃんて北京語が喋れるんでしょ」って言われたことがあったんですけど、((中略))で通訳をやったんですけど、覚えてるのが急に呼ばれておいしかどうか聞いてみてって言われて「好吃嗎？」って言ったんですけど、周りの子たちがやってことすべて止めて30人くらいの目が急に自分に向いて、でもうそれがほんとに恥ずかしくて、泣きながら教室を出てって（　）ですけど。やっぱりそういうイレギュラーな対応が自分にとって恥ずかしかったなって思います。

アケミ 9:45-10:40

アケミは幼稚園入園以降、中国語を話していると変な顔をされたり、砂を投げられたり、クラスメートの好奇の目に晒されたりした。上記の語りからは、それまで「普通」だと思っていた自分の家庭内言語環境が実は一般的ではないという気づき、さらにそれに対する奇異の目や反感を受けた経験の積み重ねにより、「私の家庭環境は恥ずかしい」と感じるようになったことがわかる。

同時に、以下の発話データからは、家庭内での母親との徹底した中国語使用にも原因があったことが窺える。その徹底ぶりは母娘ともに認識されている。

発話データ 6

あの：ただ話をかけるだけです。（学校）が通常日本語ですから帰ってきた（ところ）を中国語に直して言わせる。あとは日本語でなんか言われても無視。【hhhh】hhh おやつも出さない。

Aさん 9:42-10:02

発話データ 7

【けっこう徹底してもうお母さんは中国語】そうです、そうです。私が例えば日本語で何か話しかけると「あ、お母さん日本語わからないから」ってずっと言ってて、とにかくお母さんと喋る時は中国語じゃないと相手にしてもらえないっていう【わあ：：すごい徹底してますね。だつてお母さん日本語すごい上手でしょ？】あ、そうですね。【hhh 留学もそうだし今のお仕事聞いてもね】小さい頃はなんで私の日本語だけわかんないんだろうって思ったり hh

アケミ 15:47-16:18

Aさんは、アケミに日本語で話しかけられてもわからないふりをしたり、無視したりした。このように子どもの複数言語の併用に対してマイノリティ言語の親がマジョリティ言語をわからない（聞こえない）ふりをしたり、子どもに軽い罰を与えるというは、徹底したOPOLやマイノリティ言語のイマージョンアプローチの家庭に比較的よく見られるストラテジーのようである。しかし、子どもへのネガティブな影響も報告されている（Wilson 2020）。実際Aさん母子も、アケミの日本語能力が上がるにつれて母子間のコミュニケーションに支障をきたすようになっていったことが、以下の発話データ8と9から窺える。

発話データ8

小さいころ例えれば幼稚園でいろんなことが起きると思うんですけど、やっぱ教えたいんですね、お母さんに。「今日狼さんがね、あかずきんちゃんにね」って。でもその単語が出てこないので「今天おおかみさん吃了あかずきんちゃん」ってなって単語単語になっちゃうときがあるんですけどもうぜ：んぶ矯正されて。でそれがほぼ嫌だったので、なんか2歳の時とかはお母さんと喋らないっていう時期があって⁷⁾、お父さんが夜帰ってくるのを待って話せばいいやみたいな。なのでそういう時期は母はやっぱり悩んだとは聞いてますね。

アケミ 16:40-17:17

発話データ9

【子どもの方がだんだんちょっと嫌がっているなとか抵抗しているなって感じはなかったですか？】ありましたよ：色んなこと【ありました？】ありました、は：い。幼稚園に入るまでは私と一緒にいる時間が長かったので、特に（そういうのは）なかったんですけど、幼稚園に入つてからどうしても周りも日本語だけですし、日本語がもうどんどんどんどんこう伸びていくような感じで。で幼稚園から帰ってきて、「なんとかちゃんがなんとか君が」って言って来てもいちいち私が直して言わせるんで（つまんないん）です、子どもにとては。でいつとき私となんにも喋らない。めんどくさいから。で幼稚園であったことはすべてお父さんに。私とは喋らないっていうのはありましたね：

Aさん 10:13-11:00

アケミの語りからは、幼稚園であったことを母親に教えたいたのに、日本語をすべて矯正されて嫌だったという当時の気持ちが窺える。一方、Aさんの語りの中の「(アケミの)日本語がどんどんどんどん伸びていく」という表現からは、アケミの中国語が日本語に圧倒されていくことに対する当時のAさんの焦りが感じられる。それに対しAさんは、アケミの日本語を逐一「直して言わせる」方法をとったため、ついにはアケミから会話を拒否されてしまう。幼少期の親子関係において、子どもが自分とまったく話さなくなるというのは母親にとってかなり衝撃の大きなできごとだと思われるが、それでもAさんは以下で語られるように方針を変えなかった。

発話データ10

【そこでお母さん、あちょっと方針変えなきゃっていうふうにはならなかつた？】寂しかつたで

す、私としては。それはとっても寂しかったですし：。でもここで：折れたらたぶん：戻せないな【ああ：】ありましたから、はい、なんとか乗り越えようと。【あ：：そう、ちょっと心を鬼にしてっていう感じですね】はい。【うわ：：そうですか：：：でもね、その成果が後にねやっぱり出ましたね hh】そのうち：理解してもらえると h 信じて hh

Aさん 11:00-11:37

発話データ 11

【アケミさんが喋らなくなつてもそれでも中国語を貫いていた時はご主人は何も言わなかつたですか？やめたらとか】いやいやいや。言わせなかつたです。【い hh 言わせなかつた hhh】hhh でも主人自身も、あの留学経験があるんで、母国語以外にもう一つの言葉ができるっていうのはすごくいいことだとたぶん理解してくれていたと思うので、でも自分なんか手伝うとかいうのはできないんでただ（見守ってくれて）いたと思います。

Aさん 12:15-12:50

発話データ 10 からは、「とっても寂しかった」けど「ここで折れたらたぶん戻せない」、「なんとか乗り越えよう」という、当時の Aさんの悩みや葛藤を見てとれる。しかし、発話データ 11 の前半の「言わせなかつた」という表現からは、夫に口を出させないほどの強い決意で取り組んでいたこともわかる。同時に、夫は「留学経験がある」ため「もう一つの言葉ができるっていうのはすごくいいことだとたぶん理解してくれていた」と語っているように、夫の暗黙の理解を感じながらの実践であつたことも窺える。

4.4 小学校低学年：ネガティブ期

幼稚園入園後に急激にネガティブになったアケミのバイリンガリズムに対する態度は、小学校半ばを過ぎる頃までしばらく続いた。その時期いかに中国語を嫌がっていたのかは、以下のアケミの語りからも確認できる。

発話データ 12

それまでは授業参観とかお母さんがきて「你好」とか「很棒很棒」とか言われてもすごい白い目で見られるので、学校では絶対に話しかけないでって約束を決めたりそれくらい恥ずかしいことだったんですけど…

アケミ 7:44-8:00

発話データ 13

【でもお母さんは小さいときからけっこう外でも躊躇なくもう中国語を使っていた？】そうですね、最初は躊躇なく喋ってたんですけど、でも私があまりにも恥ずかしそうにしてたので、途中からはちょっと小声で喋るようにしてたって言ってましたけど、ま、母自身はそれをけっこう後悔してるって言ってましたね。【なんで、え？何を後悔してるんだろう】やっぱりお母さん自身がそれを小声でやったりするその：行為自体が中国語は恥ずかしいことってふうに子ども

に見せつけてるような感じになるから、もうちょっと堂々としくべきだったなっていうふうには言っています。

アケミ 8:50-9:30

発話データ 12 で「白い目で見られる」と語っているように、アケミが中国語を嫌がる主な原因は周囲の目に対する「恥ずかしい」という感情であったことが窺える。Aさんはそのようなアケミの気持ちに配慮して「外では小声で喋る」ようにしたり、「学校では話しかけな」いという調整をしつつ、アケミにはどこでも一貫して中国語を用いていたことが確認できる。

4.5 小学校高学年：上昇期

小学校後半から、アケミの中国語に対する気持ちは「恥ずかしい」から徐々に「すごいこと」へと好転していく。その要因をアケミと Aさんそれぞれが以下のように述べている。

発話データ 14（発話データ 12 の続き）

小学校高学年ぐらいになってきてだんだん S 県の近所にもちょっとずつ外国の子ども達が来て、でなんかそこから周りのお父さんお母さんとか友達の目が変わってきて、でなんか「中国語できるのすごいね」って言われ出して、そこからなんか「あ（中国語）できることってすごいことなんだ」って思い出して、ちょっと上向きになっていったって感じですかね。

アケミ 8:00-8:24

発話データ 15

【それがいつぐらいにならなんか、あんまり抵抗感無くなってきたな：って感じました？アケミさん】低学年：：ぐらい。周りのお友達がみんな英語を勉強し始めたりして、でお友達がうちに遊びにきたりすると「今何語？何喋ってんの？」って。でそのあの遊びに来てくれた親も「中国語喋れるんだ、すごいね：：」そこから「あ私はすごいかも：」っていうふうに【hh】思ってくれるようになって。

Aさん 11:37-12:09

以上の語りで、アケミと Aさん双方に言及されているのが、周囲の友達やその親の中国語に対する意識の変化である。アケミは、「S 県の近所にもちょっとずつ外国の子ども達が来て」と述べているように、その要因を居住地の外国人住民の増加にあると考えている。一方、Aさんは、友達が英語学習を始めたことで外国語に対する意識が変わり、アケミの中国語を肯定的に評価してくれるようになったことにあると思っている。

4.6 中学以降：ポジティブ期

小学校高学年頃から周りの友人や親たちに褒められるようになって、恥ずかしさを克服しつつあつたアケミのバイリンガリズムに対する態度は、中学以降、安定してポジティブな状態になった。その理由をアケミは以下のように語っている。

発話データ 16

中学ぐらいから、そうですね、そこ ((小学校高学年)) からやっぱりもう「すごいね」っていう感じになってたので、割と恥ずかしいという感じじゃなかったんですけど、そこから言語に興味が出てくるようになりまして、みんなは日本語と英語だけしか比較できないんですけど自分は中国語ができるんで、単語の発音とかの習得も速かったですし、中国語ができることで英語の文法とか、文法は中国語と似てるでそれもすごく習得が速くて、なのでなんかこう、中国語できるっていうのは中国語が話せるってだけじゃなくていろんなメリットにつながるんだな：っていう気づきがあった年ですね。

アケミ 18:15-18:59

中学で英語学習が始まると、アケミは中国語ができることで周りのクラスメートよりも英語の発音や文法の習得が早いことに気づく。つまり、アケミにとって中国語はもはや「恥ずかしい」ことではなく、むしろ英語学習に有利に働く「メリット」、つまり自分の強みと捉えられるようになったことが窺える。一方、以下の語りで示されるように、Aさんがそう確信できるようになったのは、もう少し後のことである。

発話データ 17

【すごいですね、それは。最後まで挫折されずに貫いたっていう】(いっぱいありました) たよ：格闘もありましたよ:いっぱい。【格闘ありました?】でも、じゃ諦めようって言うような挫折じゃないんですけど、いいのかな：これ続けていいのかな：っていう意味で、う：：ん、そう言う意味の挫折はありましたね。【う：：ん】だからじゃ (やめる) って言うのではないんですけど。【ふ：：：ん。そうですか：：もうどのぐらいの時に、よしつこれでよかったんだっ hh て言う感じになりました?】高校になってからですね。【あ、あそなに遅く?それはなん、高校はなんですか?】高校あの英語クラスに入ったじゃないですか。英語本格的に勉強すると英語と中国語の語順で似てるじゃないですか。で英語を勉強しやすい。覚えやすい。中国語ができるから。っていうふうになって、あよかった：：って。もう一つのチャンスが増えたから、アケミにとっては。

Aさん 37:58-39:02

発話データ 17 では、最後まで OPOL を貫いたことに感嘆を表明する調査者に対して、Aさんが「格闘」⁸⁾ や「いいのかな：これ続けていいのかな：」という意味の「挫折」がたくさんあったことを告白している。そして、アケミが高校の英語クラスに入り、アケミにとって英語という「もう一つのチャンスが増えた」ことで、やっとそれまでの迷いが確信に変わった。つまり、アケミの幼稚園入園から高校入学までの約 10 年間、Aさんにとっては悩み、葛藤し続けたバイリンガル育児だったと言えるだろう。

5. 考察

5.1 OPOL を貫くことができた要因

前節では、徹底した OPOL を実践した A さんとアケミの育児・成長経験を両者の語りから検証した。その結果、マイノリティ言語の使用を厳格に強要する家庭で見られがちな親子間のトラブル（子どもによる会話の拒絶）を A さん母娘も経験してきたことが明らかになった。それでも A さんが OPOL を貫き通すことができた背景にはどのような要因があるのだろうか、以下に考察する。

まず、A さんが一貫して OPOL をやめないという強い意志を持っていたことが複数の語りから確認できた。A さんはアケミの出生時すでに「徹底して母国語を教えよう」と考え、Wilson (2020) で報告されている OPOL 家庭の親のストラテジーと同じように、アケミの日本語をすべて訂正し、無視し、軽い罰を与えるなどの方法を用いた。結果として、アケミから会話を拒まれるようになっても、「ここで折れたら戻せない」から「なんとか乗り越えよう」と意志を曲げなかつた。また夫には何も「言わせなかつた」という表現からも、A さん自身の強い決意があつたことが感じられる。

しかし、どんなに外国人親が強い意志を持っていても、一緒に子育てをする配偶者の協力がなければその方針を継続するのは難しいであろう。実際、中村 (2024) では A さんと同時期に日本で子育てをした台湾人母が、夫の反対にあつたために中国語での子育てを諦めたというケースも報告されている。一方、A さんの場合は、夫も中国語が堪能であり、外国語を身につけることの利点を理解していたことが、A さんの方針を黙って見守る姿勢につながつたようである。先行研究では、特にマジョリティ言語の親がマイノリティ言語を理解できない場合、OPOL によってマジョリティ言語の親が疎外感を感じ、家庭不和になる可能性が指摘されているが、A さんの家庭ではその問題がなかつたことが OPOL を貫けた要因の一つであろう。

3 つ目の要因は、第三言語、つまり英語の存在である。英語学習をきっかけに周りの友達のアケミの中国語に対する目が好奇から憧憬に変わり、それによってアケミのバイリンガリズムへの意識は羞恥心から自尊心に変わつた。また、アケミ自身も中学での英語学習を契機に中国語のメリットに気づき、英語を自身の強みとしていった。このアケミの変化が、A さんの確信へとつながつたのである。

5.2 A さん母娘について特筆すべきこと

本項では、分析では描写し切れなかつた、A さん母娘について調査者が特に気がついたことを述べる。以下の点は、A さん母娘が OPOL を徹底できた直接的な要因とは言えないかもしれないが、間接的に影響している可能性があるように思われる。

1 つ目は、A さんもアケミも言語表現能力が非常に高いことである。A さんは高校卒業後に日本留学を目指したことについて、「言語が大好きで」「日本で 1 年だけ日本語学校で勉強して、それから欧米の方に（英語を勉強しに）行きたかった」と語った。しかしほぼゼロから始めたにもかかわらず、1 年で法学部に入れるほど日本語が上達したため日本の大学に進学した。インタビューでも質問に対して明確に理路整然と答えるのが印象的だった。そして、アケミも同様に高い言語能力を持っており、インタビューでは 1 つ 1 つの質問に対して経験や意見をかなりまとまった形で言語化していた。A さんによれば、アケミは幼少期から絵本が大好きで毎日のように読んでいたため、幼稚園で日本語能力が遅れていて困ったことや国語の成績に不安を覚えたことはなかつたそうだ。中学に入って中国語と

英語の類似点に気づき英語を得意としていったのも、言語能力の高さの表れと言えよう。

2つ目は、アケミの「台湾」に対する思いである。アケミは幼少期に中国語に対して恥ずかしさを感じていたものの、台湾に対してネガティブな思いは持っていないかった。むしろ台湾は長期休みに滞在する楽しい場所で、「おじいちゃんおばあちゃんに甘やかされて、安親班でも日本人だってちやはやされて、もう台湾が大好きだった」と語っている。また、小さい頃から「日本ってもう恵まれた国だし大きい国」なので「台湾人が日本をバカにするのはけっこう大丈夫」だけど、「日本人が台湾をバカにするのは悲しくて」「小さい時から不遇な台湾を見てきたから」「台湾のことを悪く言わると守りたいという気持ちが生まれる」と述べている。これらの語りからも、台湾への親愛の情が窺える。

3つ目は、Aさんとアケミの良好な母娘関係である。アケミは、お母さんはどんな人かという質問に「小さい頃からおおらかだったし」「面話（表面的な話）はしない、ストレートに話したい、もらった恩は忘れないし自分もなるべくお世話したいという感じの性格」だと好意的に捉えており、自分も母親のような台湾の「人情味が好き」だと答えている。また、前節のアケミの語りの中には、子どもの頃のことをAさんと話し合ったことがあることを示唆する箇所が散見される（発話データ8と13）。実際、分析全体を通して2人の過去のできごとの捉え方には大きな齟齬が見られないことも注目に値する⁹⁾。さらにAさんは、OPOLの徹底以外の面では育児においてアケミの進路や就職などにまったく介入せず、アケミを全面的に信頼していたことを語った。以上のことから、インタビュー全体を通して、2人は常によくコミュニケーションを取り、良好な関係を築いてきたのだろうという印象を受けた。

6. おわりに

本研究では、日本で徹底したOPOLの育児を行った台湾人母Aさんとその成人した娘、アケミの語りから、母娘それぞれがOPOLの育児・成長過程をどのように捉えているのかをライフストーリー研究の手法で探究した。その結果、アケミの成長過程でバイリンガリズムに対する態度が急激に悪化し、しばらくネガティブだった時期を経て、最終的にはポジティブに捉えられるようになった経緯が明らかになった。その間に母娘それぞれにさまざまな困難があり、それを乗り越えるまでのAさんの葛藤も浮き彫りになった。それでもAさんがOPOLを貫き通すことができた要因として1) Aさん自身の強い意志、2) 夫の高い中国語能力、3) 第三言語である英語の存在、が見出された。また間接的な要因の可能性として、1) 母娘ともに高い言語能力、2) アケミの台湾に対する親愛、3) 母娘の良好な関係、が示唆された。

先行研究で述べた通り、従来のFLP研究は、親の言語イデオロギーや言語実践など親の視点からの研究が主であり、子どもの視点も取り入れることの重要性が指摘されていた。またOPOLの研究の多くは、研究対象が現在子育て中の親（子）であった。それに対し、本研究ではすでに子育ての終わった親子のライフストーリーにより、特に成人した子どもの語りからFLP研究に子どもの視点を取り込むことができた。その点が、本研究の意義だと言えよう。

しかしながら、本研究はFLPとしてのOPOLの是非を論じることが目的ではないし、バイリンガル育児を実践している家庭がみなAさん母娘をモデルにするべきだと推奨しているわけでもない。特にOPOLは、近年の言語教育の潮流である、個人の持つ複数の言語レパートリーを重視し状況に

応じた多様な言語実践を推奨する複言語主義の理念とは、相容れない実践であることは否めない。ただ、育児とは先の見えないタスクであり、誰もが手探りで試行錯誤しながら行っているものだ。バイリンガル育児における不安と試行錯誤はなおのことである。現在はバイリンガル育児に関して中島(2016) や近藤ブラウン・坂本・西川(2019)などの参考書があり、インターネットの発達も加わって、実践方法の専門的な知見は比較的手に入りやすくなっている。しかし、実際にバイリンガル育児をした親がその過程でどんな思いをしたのか、育児を終えた今どう感じているのか、子ども自身にとってはどんな経験だったのかなども、現在育児中の親にとって貴重な情報であろう。本研究がその1例として、現在バイリンガル育児中の親子の参考になれば幸いである。

最後に、バイリンガリズムに対するアケミのネガティブな状態が継続した要因の1つが、周りからの奇異や反感の目であったことは、私たち社会の1人1人が真摯に受け止めるべき課題である。Aさんは、アケミの懇願に合わせて外で中国語を話すのを遠慮する態度を見せたことが、アケミの羞恥心を助長してしまったと後悔していた。しかし、本当に問題があったのはこの母娘の側ではなく、社会の目の方である。現在、日本社会はますます多言語多文化化しているが、誰もが好きな言葉で堂々と話せる世の中を実現するために、自分も含め教育に携わる大人たちに課された使命は大きい。

謝辞

本論文修正にあたり、2名の査読者には大変貴重なご意見をいただきました。ここに感謝申し上げます。なお文責はすべて著者に帰します。

付記

本稿は、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会2023年度研究大会において発表した内容に加筆、修正したものです。また、本研究は台湾科技部専題研究計画『在日日台家庭的繼承語教育與子女的自我認同』(110-2410-H-032-024-) の補助を受けています。

注

- 1) Wilson (2020) では、King, et al. (2008) の定義を踏襲しつつ、「明示的および暗示的な計画 (the explicit and implicit planning)」(p.3) と言い換えている。
- 2) アケミのインタビュー時、筆者はアケミの結婚については知らなかった。知ったのはAさんのインタビューの前である。
- 3) プライバシー保護に関しては、協力者とその家族の氏名や出身地・居住地の市町村名、学校名、勤務先などの固有名詞に、偽名あるいは記号を使うことで同意を得た。
- 4) Aさんのインタビューでは高校以降の子育ての話はあまり出てこない。またアケミのインタビューでも、中学以降の話は台湾留学後のことについて重きが置かれているため、本研究では分析範囲に含めなかった。
- 5) ③から④へ変化した時期については、Aさんとアケミの理解は若干ずれている。
- 6) 本研究で掲載する発話データは、調査協力者の発話から言い淀みなどをある程度除いた語りの抜粋である。
() は聞き取り困難または不確定な部分、(()) は補足説明、【 】は調査者の発話を示している。hは笑い声、:は音の延長を表す。発話データの下に書かれた数字は発話時間（例えば、発話データ1は、Aさんのインタビュー開始後7分04秒から7分35秒の間に起こった語り）を表示している。
- 7) 一般的に2歳はまだ幼稚園に入園する年齢ではないため、アケミの言い間違いか記憶違いだと思われる。
- 8) 文脈から考えて「葛藤」の言い間違いである可能性も考えられる。
- 9) 3.2で言及したように、アケミは以前に自身のバイリンガリズムについて講演をしたことがあり、その準備のためにAさんと話し合った可能性も考えられる。

引用文献

- 近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美(編) (2019)『親と子をつなぐ継承語教育-日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版
- 坂本光代 (2019)「バイリンガル・マルチリンガルの継承語習得」近藤ブラウン・坂本・西川(編)『親と子をつなぐ継承語教育-日本・外国にルーツを持つ子ども』(p.15-25)くろしお出版
- 桜井厚 (2002)『インタビューの社会学-ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子(編) (2005)『ライフストーリー・インタビュー-質的研究入門』せりか書房
- 中島和子 (2016)『完全改訂版バイリンガル教育の方法-12歳までに親と教師ができること-』アルク
- 中村香苗 (2024)「在日台湾人母の子育てのナラティブ分析-台湾留学への戦略的介入-」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』20, 37-53.
- やまだようこ (2021)『ナラティブ研究-語りの共同生成』新曜社
- Döpke, S. (1992) *One Parent-One Language: An Interactional Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Döpke, S. (1998) Can the principle of ‘one parent-one language’ be disregarded as unrealistically elitist? *Australian Review of Applied Linguistics*, 21(1), 41-56.
- Fogle, L. W. & King, K. A. (2013) Child agency and language policy in transnational families. *Issues in Applied Linguistics*, 19, 1-25.
- King, K. A., Fogle, L. W. & Logan-Terry, A. (2008) Family language policy. *Linguistics and Language Compass*, 2 (5), 907-922.
- Ronjat, J. (1913). *Le Développement du Langage Observé Chez un Enfant Bilingue*. Paris: Librairie Ancienne H. Champion.
- Wilson, S. (2020) *Family Language Policy: Children’s Perspectives*. Cham, Switzerland: Palgrave Macmillian.
- Yamamoto, M. (2001) Does the “one parent-one language” principle work? *Educational Studies*, 43, 235-240